2023年4月23日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

主イエスにぶん殴られて

［ローマの信徒への手紙3章9～26節］

では、どうなのか。わたしたちには優れた点があるのでしょうか。全くありません。既に指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も皆、罪の下にあるのです。次のように書いてあるとおりです。

「正しい者はいない。一人もいない。悟る者もなく、神を探し求める者もいない。皆迷い、だれもかれも役に立たない者となった。善を行う者はいない。ただの一人もいない。彼らののどは開いた墓のようであり、彼らは舌で人を欺き、その唇には蝮の毒がある。口は、呪いと苦味で満ち、足は血を流すのに速く、その道には破壊と悲惨がある。彼らは平和の道を知らない。彼らの目には神への畏れがない。」

さて、わたしたちが知っているように、すべて律法の言うところは、律法の下にいる人々に向けられています。それは、すべての人の口がふさがれて、全世界が神の裁きに服するようになるためなのです。なぜなら、律法を実行することによっては、だれ一人神の前で義とされないからです。律法によっては、罪の自覚しか生じないのです。ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。このように神は忍耐してこられたが、今この時に義を示されたのは、御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです。

1. 人間は、皆罪人

よく教会に通っているクリスチャンが誤解されることの一つに、「私はあなたたちのような聖人君子ではなく、とても教会に行くような人間ではない」と言われるようなことがあるかと思います。では、皆さんは、私たちは、聖人君子だから教会に通っているのでしょうか？勿論そうではありませんよね。今日の聖書の箇所の中で、パウロは「ユダヤ人もギリシア人も皆罪の下にある」（ローマ3:9）、つまり人間は皆罪人なのだと言っています。そうです、私たちはむしろ自分自身がダメな人間である、と言うことを知っています。いや、知らされています。そのことが信仰において、神様との関係において、とても大事なことですよね。そうでないと、信仰というものが何か自分を飾ってくれるアクセサリーのようなものになってしまいます。むしろ、裸同然、ボロボロのままの自分でいられる場所がある、この神様の前では飾らないでいることが出来る、それがキリスト教信仰の大きな喜びなのだと思います。

それでも私は、クリスチャンになっても信仰というものがよく分かっていなかったなあと思います。いや、今でもそうなのだと思います。何が一番分かっていなかったかと言いますと、信仰とは「持ち物」ではないということです。「持ち物」というのはある意味比べられるのです。目に見てて優劣がつけられる。しかし今日の箇所でパウロがくどい程に語っているのは、信仰というのは、自らの力で獲得する（出来る）というものでは全くなく、それは、イエス・キリストの出来事を通して与えられる贈り物（ギフト）・賜物なのだということです。ですからそれは変なプライドも消えてしまいます。今日は3章26節までをお読み頂きましたけれども、27節以下の所もご覧頂くと、そこには「では人の誇りはどこにあるのか。それは取り除かれました」と言っているのを見ることが出来ます。これも凄い言葉です。あの「律法」を与えられたユダヤ人としての誇りに溢れていたパウロが言っているのです。或る手紙の中では、これまで持っていた自分の宗教的プライドなどゴミ屑（塵芥）のようなものだとさえ言っていますよね。パウロはそういうものの上に立つことがいかに意味がなくわざわいなことであるかを、主イエス・キリストとぶつかることによって、いつの間にか捨てさせられたのだと思います。「正しい者はいない。一人もいない」と彼は旧約聖書を引用しながら言いましたが、その引用を何故するのかと言えば、彼は神様を讃美してるからです。こんな全く正しくない、むしろ自分自信を神のように誇っていた勘違い男を神様は、イエスを私に出会わせることによって、断罪するどころか赦し、その体験を通して証しする者へと変えて下さいましたと言いたいのです。

[2]　 無罪判決

今日は、「聖書教育」誌では20節までだったのですが、どうしても続く21節以下も一気にお読みしたいと思いました。この「ところが今や」から始まる言葉はとても素晴らしいです。―「ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。」

この「今や」というのは、正に「今」です。旧約聖書の時代を無視している訳ではありません。神様は人間をお造りになった時、命の息を吹き込まれました。ふーっと。そして生きるものになったのですが、人間同士の比較が始まり、最初の殺人が起こり、もう神など要らない、俺たちが天から見下ろして世界を支配すると言わんばかりに傲慢にもバベルの塔を建てましたがそれを主は中断させられましたね。また、悪がはびこり、この世界を一掃しようとされましたが、それも思い留まられ、ノアと一族、動物たちも憐れまれ、方舟を造らされ、新しい時代へとつなぎ、その後アブラハムと契約を結ばれ、更にはモーセをお立てになって、つぶやくイスラエルの民たちを諦めないで「信仰共同体」の信仰を導かれたのです。神様は、愛と忍耐の神様です。バビロン捕囚も経験させられましたが、この信仰共同体をなくする、ということはされませんでした。

…そして「今や」です。新約聖書の時代に入り、ついに神の義が示されたのです、と言っています。23節と24節にこうあります。―「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」これは凄いことを言っていると思います。とてつもない飛躍があるのです。23節では、私たちはもう皆どうしようもない男たち女たちだよね、と言っていながら、24節では、神様の恵みによって何の条件もなく私たちは義とされている、イエス・キリストの贖いの十字架のお陰で、と言っているのです。この 「義とされる」というのは、私はどう言い替えるのが分かりやすいのかなと考えたのですが、こう言っても良いのかなと思いました。―「無罪判決の言い渡し」。しかもこの裁判は「死刑か無罪か」の裁判です。そして裁判官である神が私たちに「無罪-NO Guilty-」を宣言される。どうしてか。あなたの代わりに罪を背負って下さる方が現れたからです。

[3] イエス様とのぶつかりあいを！

私は、今「死刑か無罪か」の裁判、と言いましたが、先週宣教の中でお話した『走れメロス』（太宰治）の物語をもう一度思い起こしたのです。メロスが死刑判決を受けた自分の身代わりに親友のセリヌンティウスを人質として王に差し出し、妹を嫁がせるため三日間だけ猶予をくれ、必ずその日の夕暮れ迄までには戻って来るというのです。親友もそれを受け入れます。所が結婚式は上げたものの、洪水や、山賊や、諦めの心に苛まれたりしてメロスはもうだめだと思った。でも最後の力を振り絞りながら走って戻るのです。「いや、私は信じられている」。そのことがメロスを走らせた。夕暮れ直前に間に合い、セリヌンティウスは解放され、メロスは処刑される筈だったのが、人間の心など信じられぬと公言していた暴君の王様が、「お前らは私の心に勝利した」と二人に語り、美しく終わる訳なのですけれども、二人は抱き合う前に、実は殴り合っているのですね。ここが僕は今回ハッとさせられたのですね。メロスが友に「あなたを心で裏切ったのだ。私を殴れ」と言い、それに対して友セリヌンティウスも「私も一瞬だけ疑った。殴ってくれ」と互いに言い、それぞれがお互いを殴ります…。

信仰的にこの物語を読むことも出来る気も致します。どこまでも信じて待ち、そのことがメロスに走らせる力となったセリヌンティウスがイエス様に似ているのか、或いは試練や苦難を経ながらも友を囚われの身から自由にするために走るメロスがイエス様に似ているのか、そのどちらも言えるようにも思ったのですが、いずれにしてもここで二人の心は丸裸になっていますよね。「あなたを裏切った」「あなたを疑った」。そして殴り合い。ちょっと飛躍した言い方になるかもしれませんが、私はそのようにイエス様とのぶつかり合い、真剣勝負をしているだろうか？と思いました。皆さんはどうですか？もしかしたら私たちは、あまりにも当たり前のように「無罪判決」を受けていないだろうか。私たちが無罪判決を受けるためには、あの主イエスが死刑判決を受けて下さったのです。神の子が血を流して下さったのです。それを冷えた心で受け止めてしまう私たち…。イエス様は、私たちが神様とぶつかることが出来るために送って下さったそんな存在なのではないでしょうか。時にイエス様の方から激しく迫ってこられ、時にはこちらからその胸を激しく叩いていく。そういう「祈り」を待っておられるのではないでしょうか。イエス様、どうかこの私をぶん殴って下さい。私の罪を分からせて下さい。そして、少しでもあなたの痛みが分かるように、あなたの愛のパンチが感じられるように。

私たち、生きて行く中で思わぬ試練に出会うことがあると思います。それはきっとイエス様が生きておられる証しなんだと思います。苦しみや葛藤の中でこそ、主の憐みと、痛みを背負いながら共に生きて下さる主イエスの現実が私たちにも分かるようにされていくのではないでしょうか？この手紙を書いた使徒パウロ自身がそうだったように。3章25～26節をお読みして祈ります。

「神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。このように神は忍耐してこられたが、今この時に義を示されたのは、御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです。」

主イエス・キリストの父なる神様、今日のこの礼拝に共に与ることが出来て感謝致します。今私たちは、罪人であるにもかかわらず、無罪放免、義とされています。私たちはあなたの愛の全貌は、御国に行くまで分からないと思いますが、分かる恵みを数え、噛み締め、生きて行くことが出来ますように。あなたが私を決して手離さないという事実、それを様々な人生の中で生きる力、愛してゆく力とさせて下さい。十字架と復活の主の御名によって祈ります。アーメン。